

被爆の証言と原爆展

7月17日、10回目となる被爆の証言と原爆展が道庁1階で開会。廣田会長挨拶の後、川去・金子・中村・溪口さん4名(川去・溪口さんは被爆二世)が語りました。それぞれ今までにない新しい話があり、被爆者の声に耳を傾けることの大事さを知らされました。かつてない多くのメディアもかけつけました。

18日、2日目、大村さん、宮本・松本さん、土谷さん(二世)が原爆の怖さとは何かを語りました。最後は札幌南高(定)一年生徒有志による被



爆者の手記の朗読劇「あの日の時 ヒロシマで」。実に60名を超える観客が見守る中「私たちが語り伝えます」と結び大きな拍手を浴びました。

三世代で語る平和の集い

7月30日、札幌市南区で新婦人主催の「三世代で語る平和の集い」が開催、110余名が集いました。

被爆二世の川去さんが「被爆の父を胸に」と語り、ついでDVD「ノーモア・ヒバクシャの願い」を視聴、そして学童クラブのパフォーマンスと三世代一緒の昔遊び、最



後に全員で合唱し平和への思いを胸に刻みました。それぞれの世代が生き生きと参加していたのが印象的です。

いつにも増して忙しかったこの夏

被爆79年の夏は、いつにも増して忙しい日々が続きました。

一つにはテレビ局、新聞の取材が多かったこと、それぞれよく報道してくれたと思います。

二つには青年たちの動きが目立ちました。7月10日、勤医協労組の皆さん、21日、札幌地区反核平和の火リレ

「実行委の皆さん、8月4日、札幌平和委員会の青年の皆さんです。」

札幌平和委員会の参加者は次のような感想を送ってくれました。「金子さんのお話をはじめおききしました。(広島で被爆し、秋田の学校へ転校した際に、「おめえ、近寄ってくるな」と差別に合った話を聞き、心がえぐられるような思いをしました。また、語り部活動の中で、まだ物事が分からない小学生から投げつけられた言葉、自分だったら耐えられるかどうかと考えました。それでも、東日本大震災での福島原発の被害と自分の経験を重ね合わせ、被爆者であることを名乗りだしたくないと思いつつも、語り部活動と続けられている姿を見て、次の世代を生きる私たちは、しっかりと受け止める責任があるのだと感じました。そして、核廃絶に向けた運動を被爆者だけに任せるのではなく、一緒に「ノーモア・ヒバクシャ」の声をあげていきたいと感じます。核兵器禁止条

約は希望！」

三つには幅広い市民の皆さんが来館しました。新婦人(厚別・清田)、九条の会(平岸・厚別)、生活クラブ生協等々。また原水協(室蘭、北見)、札幌第三友の会、士別市民集会、長沼町での平和講演会、北の星保育園の職員の皆さんも被爆者を招いて話を聴きました。

四つには被爆者の手記に関心が高まった年ではないでしょうか。朗読劇「父と暮らせば」「この子たちの夏」、そして札幌南高高校生たち。

この他札幌平和行動実行委員会の諸活動、日本共産党国会議員団・予定候補の来館、親子づれの来館、修学旅行事前学習のパネル展など、多彩でした。(事務局)

会館は10月から 日月火の3日間 開館 といたします。

秋以降来館者が減少することにあわせ開館日を上記のようにします。他のグループの場合は他日でもご相談に応じます。